

保護観察女子少年のグループワーク

前田ケイ

(テオロギア・ディアコニア 21 1987 日本ルーテル神学大学, ルーテル学院大学社会福祉学科)

1.はじめに

近年,中学生など,年少少年の非行が大きな社会問題¹となっている。特に万引きや窃盗などの初発型とみられる非行が増え続けていることが注目される。昭和62年12月25日に発表された警察庁の「少年非行の概要」によれば,同年11月末までに刑法犯で補導された少年は16万8,840名で,一年前の同じ時期の数よりも1%の増加であったが,これを窃盗,万引き等の範疇でみると,前年度より5.9%増となっている。さらに,このような非行統計には現われないが,非行予備軍ともいべき数多くの少年達がいることは周知の事実であり,なかでも女子の急速な非行化傾向は憂慮すべき大きな問題である。

どのようにしてこれらの少年や関係者を援助し,初期段階で問題の克服を図ったらよいか。これについては,このような問題解決の第一線にいる専門家達が絶えず苦心しているところである。著者はこれまで多年にわたり,法務総合研究所が行う保護観察官の研修講師としてグループワークを担当してきた関係し,保護観察官もまた,この点で多大の労苦を重ねていることを親しく知ることが出来た。保護観察においては,これまで多くの場合,処遇は個別的に進められてきたが,近年,集団を活用する処遇方法も次第に注目を集め,実際に試みられるようになってきている。たとえば,交通短期保護観察対象少年や,シンナー等薬物を乱用する少年に対して「集団処遇」を行ったり,更生保護会でレクリエーションや座談会を行ったり,集団の力動を活用するさまざまな処遇が試みられている。

しかし,集団処遇と一口にいても参考にすべき治療的教育的集団方法は様々であり,それぞれの集団的援助方法が準拠している理論的枠組みや技法も多様である。たとえば,それらには指示的集団指導法,非指示的集団療法,集団行動療法,家族療法,複合家族療法,ゲシュタルト療法,役割訓練法,ソーシャル・グループワーク方法²などがある。しかし,現状では,どの種の非行者集団にどのようなアプローチが適切であるかについてまだ十分な研究が進んでおらず,この面での→P.16 研究は急務である。

このような課題に取り組むため,著者は昨年,保護観察官とチームを組み,集団的援助方法の一つであるソーシャル・グループワーク方法を用いて,保護観察対象女子少年の処遇にあたる機会を持った。この論文ではそのグループワーク処遇の実際の経過を振り返り,保護観察対象少年に対する集団処遇の方法について考察を行ってみたい。

2.保護観察対象少年に対する実験的グループワーク計画

昭和61年6月,法務省は総務庁の委託をうけ,「非行少年の立ち直りに関する研究」を行うため,「非行問題研究会」を発足させた。著者はその研究会の一員として加わり,研究会活動の一部である「保護観察少年に対するグループワーク処遇」のプロジェクトを担当することとなった。このプロジェクトの運営は東京保護観察所観察第一課直接処遇班が中心となって行い,実施の場所も東京保護観察所と決定された³。

このグループワーク・プロジェクトの処遇スタッフは4名。グループワーカーは著者と広川洋一保護観察官であり,ほかに二人のボランティア女子大学生,寺師貴子及び高橋明美が協力者として参加した。この二人は当時,観察所で実習をしていた,社会福祉専攻の学生のうちから選ばれたものであるが,高橋は,BBS連盟の会員でもあった。

1. この当時は典型的な非行や少年犯罪があり,また第二次ベビーブームの子供たちが思春期を迎えるあたりであった。そのため,学校崩壊や暴走族などが多発していた時期でもあった。現在は,少年犯罪や非行による検挙は年々減少しています。が,皆さんご存じのようにいわゆる普通と思われる子供が突然キレ,凶悪な犯罪を起こすケースがメディアを賑わしています。さらに,潜在的には格差社会による貧困化,それによるストリートギャングの形成,あるいは貧困に起因する窃盗などが現在も相当存在しております。
2. 指示的集団指導法は,教育分野で発展している方法で,問題の多い児童に対する規範を教示する方法。非指示的集団療法は,アルコールの断酒会などで現在も行われており,別名来訪者中心療法とも言われている。カウンセラーの分析よりもクライアントの自発性や主体性を尊重し,カウンセラーは,クライアントに対し受容・共感的な態度で接する。ゲシュタルト療法も非指示的集団療法と同じように,セラピストが分析せず,クライアントが自らの言葉で気づくように促すもの。もともと神経症に対する療法で,発達理論と併せて人格の成熟と統合を目指している。有名なものは,椅子技法と呼ばれるもので,自分の中に対立する意見や自分と他者の間の対立する意見を対の椅子の相手側に設定し,思いや考えを言葉にして戦わせる。→お互いの意見を自ら演じることで理解し,現実的な活路を探し出す。
3. (黒板に書く)グループ計画の詳細は,まず機関の影響を受けている事(法務省からの委託,場所も東京保護観察所)。スタッフの役割分担も8されている。前田先生,広川,ボランティア2名の4名。実施期間と回数1986年10月~1987年1月毎月2回,計8回。課題として,回数が少ないが故に実験的にならざるを得ない。

残念ながらこの研究は、予算の都合上単年度で終了せざるを得なかったため、グループ会合は、1986年の10月から翌年1月までの4か月にわたって、毎月2回、合計わずか8回と予定された。このような回数では、処遇効果は全く実験的な試みの範囲に留まらざるを得ないことは始めから予測されたが、しかし、スタッフを含むこのプロジェクトの関係者はその範囲内で最善を尽くすべく、熱意をもって計画と運営に取り組んだ。

3. ソーシャル・グループワーク方法の特色

ソーシャル・グループワークはソーシャルワークの一方法として発達、体系化されてきた援助方法であり、他の集団方法と比較してこの方法の特色をあげれば次の通りである⁴。

- 1) ソーシャル・グループワークの目的は対象者およびその関係者の社会生活能→P.17 力の回復や強化に対する援助及び、問題をひきおこす環境や制度の改善に取り組む人々(対象者、その関係者、一般市民)への援助にある。メンバーの精神内界の問題に焦点をあて、精神治療をすることが目的ではなく、メンバーが他者や社会環境と相互作用を行う領域での機能に焦点をあて改善を図るのが、グループワークの目的である。
- 2) グループの目的と参加の条件等については、個々のメンバーおよびグループ全体と確認を行い、約束をかわす。このサービス契約をその後のワーカー・メンバー共同の取り組みの基礎に据える。
- 3) ワーカーはメンバーの人権を尊重し、受容的、共感的、非権威的態度でメンバーに接し、個々のメンバーとグループとの間に信頼関係を樹立するよう努力する。
- 4) ワーカーは一人一人のメンバーを尊重し、グループ経験が個々のメンバーのグループワーク処遇の目的に沿って最大の効果をもたらすよう、グループ過程を通してメンバーの個別的援助に努める。
- 5) ワーカーはグループがメンバーのための相互援助システムとなるようにグループ発達の促進を計る。
- 6) ワーカーはメンバーの行うプログラム活動にメンバーと同じように参加をしつつも、メンバーやグループの動きを観察し、援助目的に基づいて、グループ過程に介入する。
- 7) ワーカーは可能な限り、メンバーの自主性、主体性を尊重し、各メンバーがグループ体験を通して学び、能力に応じてグループ活動に参加していくように援助する。
- 8) ワーカーはメンバーの人間関係や生活の障害となる問題の改善および解決に有効なプログラム活動の展開に努力する。ある種の集団方法にみられるグループ過程そのものを分析することは、特別な場合(グループ作業に障害がおきた時など)を除きグループワークのプログラム活動としてはとりあげない⁵。
- 9) ワーカーは、メンバーのニーズ充足を第一目的とし、つねに柔軟なプログラム活動の展開⁶に努力し、絶えずメンバーのフィードバックを求めていく。
- 10) ワーカーはグループ活動の円滑な運営上必要な、メンバーの関係者との協力を仕事の重要な部分と位置付け、綿密な連絡をとっていく。

今日・グループワークの対象となるグループの種類がきわめて多様であるため、上記の原則を実践に生かしていく際の具体的なワーカー行動にはさまざまな違いが→P.18 あるが、以下、保護観察対象の女子少年に対するグループワーク処遇の実際を通して、これらの特色がどう活かされたかをみていくことにする。

4. 準備期の作業

著者と広川観察官は、いわばコ・リーダーとして協力していく立場にあるため、このグループワーク・プロジェクトの目的、メンバーとなる対象者の選定方針、可能なプログラム活動、グループワークの構造などについて率直に意見の交換をした。話し合いによって合意した主な内容は次の通りである。

1) グループワーク・プロジェクトの目標⁷

- (1) 非行少年の立ち直りにグループ内での相互作用がどのような効果を持ち得るかを考察する。
- (2) 保護観察対象少年のためのサイコドラマ・プログラムについて研究する。
- (3) 保護観察対象少年のグループワークにおいて、ボランティアが果たす役割を考察する。
- (4) グループワークの実施にあたって、観察所の処遇システムのありかたについて考察する。

-
4. 特に、1) のメンバーが他者や社会環境と相互作用を行う領域での機能に焦点をあて改善を図るのが、グループワークの目的であるに傍線を引いてもらう。
 5. グループワークの活動時は、例えば、メンバー間のトラブルやサブグループ同士の衝突あるいは孤立などが起きる場合があるが、この論文では、参加者と回数が少ない事、またそもそもの目標として、メンバーの社会生活能力の向上であるから、研究的な意味での集団分析は行わない事を表明している。
 6. プログラム活動をはじめに決めた事から、変更する事は良くある事である。教科書Ⅱでも、開始期の契約と作業期の再契約がそれに当たる。例えば、最初メンバーの意見に対して、反論や批判をしないで話し合おうということをグループワークの活動で取り決めたとする。しかし、それでは自由な発言が出来ないとメンバーが感じた場合、許容できる範囲で、他者の意見に提案やコメント、時には批判をするといった変更をする場合がある。
 7. (1) が達成課題、2、3は実験的考察。4がトータルとしての課題となろう。

2)対象者の選定方法⁸

対象者の選定は広川保護観察官を中心に保護観察所の直接処遇班が行う。メンバーは保護観察が開始されたばかりの15歳から16歳の女子少年のみとし、家庭裁判所で、それ程非行性は進んでいないが、家庭や保護者に重大な問題があると判断され、中学校でも不登校・学校内暴力等の不適応症状を示している者とする。

グループの趣旨については、担当の保護観察官から、候補の少年に説明し、出席を希望する者のみを受け入れる。保護者にも趣旨をあらかじめ説明し、同意を得ることとする。メンバーは固定する。

3)プログラム活動

プログラムの中心は、サイコドラマ⁹の技法を活用した劇活動とレクリエーションとし、毎回変化に富むものとする。グループ会合の終結期は、茶菓の時間とし、参加者のフィードバックを得る機会¹⁰とすることが決められた。また、プログラム計画については、スタッフ間で打ち合わせをし、また次第にメンバーの意見を取り入れていくように試みる。→P.19

4)処遇の構造

会合は月に2回とする。会合の時間は月曜日の4時から6時までの2時間とする。90分をウォーミングアップとサイコドラマの活動、30分をお茶とお菓子の時間とする。

使用する部屋は観察所の第二会議室とする。この部屋には大きな丸テーブルと座り心地のよい椅子があり、床には絨毯がひかれ、メンバーがある程度自由に歩き廻れる広さ¹¹がある。スタッフの役割分担としては、著者がグループワーカーとして、グループ運営の主要な責任を持つこと、広川観察官は観察所内の連絡調整の責任を取りながら著者を補佐し、また記録の責任を持つ。記録は参加者の了承を得てすべて、ビデオに収録することにする¹²。ボランティアの大学生達は、リーダーというよりは、むしろお姉さんの存在として行動してもらい、著者や保護観察官とメンバーとの間を媒介する¹³役割を取る。また毎回の茶菓の用意の責任を受け持つ。スタッフは30分前に集合して準備をし終了後も後片づけの後、最低30分は事後評価のために参加する。

ケースワークとグループワークの連携が重要なので、個々のメンバーの担当保護観察官はいつでも自由にグループ会合のビデオを見ることが出来る。直接処遇班は必要に応じてメンバーのケース会議を持つこととする。

5)ワーカーの自分自身に対する準備

(1) サイコドラマに対する準備

著者以外のスタッフはプログラム活動として予定されているサイコドラマの経験がないので、サイコドラマに対する準備として次の2つを実行する。

- 著者と広川観察官は愛光学園(少年院)の協力を得て、同学園で行われている心理劇に参加し、矯正の分野で実際に行われている心理劇について学ぶ。
- 広川観察官とボランティアの3人は著者が所属している東京サイコドラマ研究会のワークショップに出席し、メンバーとしてのサイコドラマ体験を持つ。

(2) リーダー準備会¹⁴

互いにチームメンバーとしての信頼感を育てること、保護観察官よりあらかじめ候補となっている参加メンバーの背景につき、最低限必要な説明を受けること、また対象者に「準備的共感」をもつ作業を行うことを目的として、4人のスタッフ全員出席による準備会を持つ。対象者にとって出席は任意とはいえ、どんな気持ちで

8. 15歳～16歳：女子(考察でも述べているが、心理劇などの感情移入しやすい年頃であると仮定)／家庭・保護者に重大な問題→援助として内面の変容よりも生活課題の解決・軽減を目的にしているため。同意、説明は契約に値する。閉鎖的グループの形成としている。

9. サイコドラマについては、P.32参考。また前田論文図表参照。

10. フィードバックの時間の設定：フィードバックを必ず行うことは大切なことであり、このことで参加者全員が発言し一人一人のニーズを聞き、調整することが出来る。そのことで、グループに対する帰属意識を高める。

11. リラックスする環境への配慮。お茶菓子、大きなマルテーブル・座り心地の良いイスなど。自由さや暖かさを演出。

12. 記録→ビデオを撮ることで、後で参加者だけではなく、他の機関へ見せるなどの活用、あるいはスーパービジョンとして使用している。

13. 援助者の役割の「媒介者」参照

14. いわゆる【波長あわせ】に相当すると考える。

観察所のグループに出席するのだろうか。

スタッフにはどんな感情を抱く→P.20 のだろうか。準備会ではこのような事に関する対象者の感情を出来るだけあらかじめ理解するため、対象者が観察官からグループに出席を誘われる面接の場面と初回のグループ場面とを作り、ロールプレイをおこなって、交互に対象者の役割を演じてみる。

以上の計画は、それぞれ実行に移され、準備が進められた。

5.参加少年

研究の期限が限定されているなど、大きな制約要因があり、プロジェクト発足までに参加を希望したメンバーは最終的に4名であった。この数はスタッフ側の4名との比率からは少なく、もう2,3名は必要という感じがしたが全員が出席すると、グループとしては8名となるので、とにかく発足に踏み切った。観察官は居住地などを勘案しお互いが初対面で今後望ましくない交流に発展しないように、グループの構成に配慮したつもりであったが、実際には少年鑑別所で一緒であった者や、以前に社会で一緒に遊んだことがある者が同じメンバーになっていることが、始まってから判ったことを付け加えておく。

参加者はそれぞれ家庭環境に問題があり、経済的に苦しい者がほとんどで、家出、窃盗、売春、などの問題を持っている。IQは85から95の間で学業は振わない。4名のうち、3名は中学3年生、残りの1名は昭和61年に中学を卒業した社会人である。いずれも昭和61年9月中旬から下旬にかけて保護処分となった者である。

以下、仮名で氏名をあげておく。

- (1)川村由美16歳社会人父母離婚母と2人暮らし
- (2)栗田雪子15歳中3.父母離婚継父、妊娠中の母、妹4人、弟1人、叔父同居
- (3)藤井靖子15歳中3父母離婚父と2人、叔母の世話になる
- (4)正田三代15歳中3父母離婚兄2人、妹1人

6.毎回のプログラム展開と評価

第1回10月6日

この日のみ、会場が観察所の宿直室となった。狭い6畳の畳の部屋。しかし、こじんまりとした、それなりの家庭的な雰囲気があり、結果的には心配したほど→P.21 悪くはなかった。定刻の4時になり、著者とボランティアリーダーが待つところへ全員が広川観察官に引率されて揃って入室、いずれも緊張した面持ち。一応のメンバー紹介やグループについての説明が終わる。すぐさま、ワーカーは、部屋の中央に広告のコピーを小さいカードに貼りつけた「言葉力カード」を15枚ほど、かるた取りのようにばらまき、自分の気に入ったカードを取るように促す¹⁵。

メンバーは直ちに興味を示し、素早く手を出すもの、考え考え取るもの、笑い声をたてるものなど、急速に雰囲気が和らいだ。全員がそれぞれのカードを選んだ理由を説明しながら、自分の呼んでほしい愛称を紹介した。ついで、それぞれの選んだカードから、イメージの世界を展開して即興的な劇をする。たとえば「いつかは」というカードをひいた藤田(記述間違い、藤田→藤井)靖子は「いまはコンナ状態だけど、いつかは普通の人になりたい」と説明したので、タイムマシンに乗って、「普通の人」の20歳になった時の劇をもらった。劇の監督役になったワーカーに助けられて、藤田はかつてよく遊んだゲームセンターを訪ねている。

このゲームセンターの場面を作るため、全員がゲーム機になったり、カウンターになったり、店員になったりして、サイコドラマでいう「補助自我」¹⁶の役をとることによって、グループ感情が高まっていくのが感じられた。始めから消極的な様子を見せていた正田もカウンターになる役をとって、観察官と手をつないでいた。一通り終えたところでお茶とケーキ。正田は「わー、かわいいケーキ」とこれまでとはうって変わったようにはしゃいでいた。劇の感想を聞くと川村は「井戸端会議みたい」、藤井は「みんないい人」、栗田は「面白かった」、正田は「自分でやるのはいやだけど、人を見るのはいい」という発言だった。最後に「贈り物」として隣の人を褒めて終わりにした。「きれいな髪の毛」とか「頼りがいのあるおねいさん」などとそれぞれ褒めていた。次回を約束して終結。

15. 典型的な開始期：グループの特徴である不安と緊張その半面、メンバーに期待が見られ、ワーカーがリラックスするように自己紹介などに仕掛けを施している。言葉カードの選択(相互作用の促し)→連想→即興的な劇→一人の連想から皆で協力することでメンバーの連帯感を作る→お茶ケーキ作りでリラックスした状況を作り→フィードバックでさらに帰属感を高める。
16. 補助自我は助監督であり、演者を支えたり、時には刺激を与えたり、また、進行を助けたりして、演者の自由な演技を補助する。～他者の心理状態を推測し、それを演じることで、あたかも自分のことのように投影する。演じられた他者もその行為を見ることでその場があたかも自分の中に他者が居ることに気づくことが出来る。

(評価)

第1回目のメンバーに対する働きかけとしては、スタッフとラポールを作ること、グループの目的とグループの持ち方などについての条件を明確にすること、グループに所属感情を持つこと、活動に興味を持ち、次回にも出席する動機を持つことなどが大切である。それらについては、大体順調な滑り出しをしたと言える。

サイコドラマ技法は、ミニューチンのいうスタッフの対象者に対するジョイニングを円滑にし、また対象者の自発性と創造性を引き出すため、短時間のうちに→P.22 参加者の防衛をゆるめ、興味を盛り上げるので、有効な方法であることが確認された。また、予想したようにお茶の時間がフィードバックを得るのに有効であった。他のメンバーに比較して、正田の消極性が目立つので注意していきたい。

第2回10月20日(正田が欠席)

栗田と藤井は会合の一時間も前から観察所に来ていた。前回のような警戒は見られないが、まだ少し緊張している。藤井は前回のような制服でなく、川村のような大人っぽい格好をしている。広い会議室なので、椅子を輪にして座り¹⁷、フルーツバスケットの変形ゲームであるフィーリングバスケットのゲームをして体を動かし、緊張をほぐす。「魔法のお店」で好きな買い物をしてもらおう。栗田は「どらえもんの不思議なポケット」川村は「なんでも食べたい物が出てくる魔法のテーブル」藤井は「怪人二十面相みたいに顔を変えられる変身マスク」をあげた。それぞれの買い物を使ってドラマをする。栗田はどらえもんの「どこでもドア」をだして、カラオケのあるお店にいき、皿を割って困っているグループと楽しく騒いでいるグループを登場させ、自分は後者の仲間に入りたくて望んだ。川村は美術館の地下にある魔法のテーブルで、参加者全員にそれぞれ、食べたいものを食べさせてやり、最後には全員でそのテーブルを囲んで賑やかだった。藤井はマスクを使ってダンボのように空を飛ぶ小さな象を演じた。

それから、人に物を贈る役、贈られる役をとり、自分のあげたい物をあげたい人にあげるドラマを演じた。ボランティアのドラマにはボーイフレンドが登場。メンバーは興味深かそうにみていた¹⁸。最後に、目の前に空き椅子をおき、グループワーク終了時の自分に語りかける形で、これからの3ヵ月間の努力目標をあげ、栗田は「学校で友達がいなくて、友達をつくりたい」。藤井は「自分でもわからないところで人が一生懸命やってくれるのだから、人のいうことは理解して頑ばっていいこう」、川村は「人から一回言われたことを守れるようになりたい」と述べた。スタッフもそれぞれ3ヶ月間の自分の努力目標をグループの中で話した。

(評価)

前回より、会の始めから、かなりリラックスしており、ワーカーやボランティアとも親しく話ができていた。プログラム活動にも自発性の高い参加がみられ、お互いのドラマや役割演技を楽しんでいる様子が観察された。栗田は動作がごちなく、自分からは他のメンバーには話しかけない。藤井は、川村と親しくなりたい様子をみせていたが、川村はあまり親しげな様子をみせなかった。(これはあとでわかったのだが、栗田と→P.23 川村は鑑別所での知り合い、藤井と川村は社会で以前からの友人であり、それを観察官に知られまいとする動機から、不自然さがみられたと思われる)

第3回11月4日栗田(前日親と争い、外泊)と正田(怪我のため通院)欠席

藤井が定刻にくる。彼女に栗田が「家出」して、今日は欠席する連絡が入っていることを伝えると、「帰りたくても、帰れなくなる時がある」と理解をみせた。川村を待っている間ウォーミングアップとして、みんなで人を待っている場面を即興劇にした。

藤井の努力目標が「他の人々を理解したい」ということであるので、10円、100円、500円、などの硬貨を紙の

-
17. 厳密には、本文に書かれている事は、レクレーションであるが、自己紹介や自分の課題を明らかにする場合は、いくつかの方法がある。ラウンドロビン(車座になって話す手法)メンバーが互いを紹介する際にもっともよく使われる方法。学校形式で座るよりも、両隣に人がいて、順番に話すことで、相互交流が図りやすい。主に、各メンバーが自分が直面している課題などを述べながら一巡する方法。このほか、メイボールリーダーから話しをして、リーダーがメンバーに返していく。その後メンバーからリーダーへという受け答えの相互作用。ホットシートというのもある。リーダーがメンバーの一人に焦点を当てて他のメンバーが見ているところで、リーダーとメンバーのやりとり。フリーフローティング:誰かの質問や言葉に反応し、他のメンバーが受け答えをしたりする。メンバーの主体的なやりとり(論文図表参照)。
 18. 後でも述べられているが、ボランティアの年齢がメンバーよりもやや上であること。また自分たちと違った普通の家庭であり、問題を起こしていない人達と言うことで、羨ましい存在である→良くなればこうした生活スタイルを得られる。

上に置きながら、自分の周りの人々との関係を現していくコイン・ソシオグラム¹⁹の技法を用いて、藤井の周りの人々のことを聞いていく。彼女は、たくさんの友達について述べたが、とくにボーイフレンドが500円、その母親は自分をよく思っていないので1円としたのが、印象的であった。川村も途中で出席、同じようにコイン・ソシオグラムをして、その現状をどう変えたいかというワーカーの質問に対し、ボーイフレンドと自分と未来の赤ちゃんがいる幸せな家庭をえがいていた。

次に今週の出来事をドラマにしていく。川村はレストランでの求人に応じて仕事のための面接に行ったというので、面接の場面を劇にして演じてもらい、採用の通知を受取り、それを母に伝える場面、さらに将来を予測して、レストランの調理場で働いている場面などを、全員で劇にした。川村は次々とくる客の注文にも、ひるまず、真剣に対応していた。

終わって、川村の劇に自分の共感を伝えるシェアリングのところでは、藤井は「勤め先では言われたことは、きちんと守って、遅れないで、頑張る」などという励まし、自分も笑い、みんなも笑い出す場面も見られた。お茶の時間に怪我をした正田に寄せ書きをした。リラックスした雰囲気の中、川村は自分が栗田と前に鑑別所で一緒だったことを話してくれた²⁰。

(評価)

栗田が家出したことに関して、メンバーは栗田の立場の辛さに共感を示し、ま→P.24 た心配していた。人数が少なかったが、川村の真剣なドラマにみんなが、引き込まれ、また、彼女の仕事がうまくいくようにグループの気持ちが一つになったような感じで、熱気のある劇となった。川村にとっても、これからの仕事のよりハサールになったのではないかと思われる。

第4回11月17日川村(仕事の都合)藤田(学校の都合)で欠席²¹

前回、「家出」と伝えられて欠席していた栗田がきたので、ボランティアやワーカー達が一人づつ、彼女に、栗田の顔を見ていま感じていることを伝えることにした。舞台のように作られた空間を使って、栗田の隣の椅子にひとりづつ順番に座りにいき、自分の気持ちを伝えた。ボランティアの一人が栗田の手をとって握りしめ、またワーカーも、栗田を抱きしめて「よくきたね、と、こうやってあげたい気持ち」と述べた。栗田はにつきりしていた。

この前、友達をつくりたい、と述べていたので、その目標にむかっている、彼女が気になることを絵にした。栗田は級友にクリップをつけていたはずのところに絵にかいた。ボランティアやワーカー達全員が絵をかいたので、それらの説明にも聞き入っていた。つぎにコイン・ソシオグラムをして、栗田は自分の家族関係を説明し、幼い弟に対する愛情を語り、また妹との関係を改善したいと説明した。

それに基づいて、家で妹と喧嘩のする様子をドラマにする。狭い団地の6畳の部屋のなかで、5,6人の子ども達がガヤガヤと口争いをしており、テレビを見ている母親に喧嘩の仲裁を訴えて頭から怒りつけられる様子が演じられた。またつづいて先週「家出してお祖母さんの家に泊まった時」の様子をドラマでみた²²。

栗田は、お祖母さんは優しい人だが、お母さんは自分の気持ちをわかってくれない、と訴えた。役割交換して母親の役をとった栗田は、自分のことを「何にもやらないで、ただハイハイしている子」といい、妹の立場からは「いないほうがいい」人であった。しかし、栗田は母親にむかって、「もうちょっと、やさしくして」と訴えている。お茶が始まった頃、しばらく休んでいた正田が来た。みんな喜んで彼女を迎え入れた。正田は「先週もらった寄せ書きはアルバムに貼った」といっていた。ボランティアたちと自分のことについて、自由にいろいろ話しをし、好きなお菓子を食べて帰った。→P.25

(評価)

栗田にとっては、大人達のなかで自分の話をよく聞いてもらった経験は、このグループの場を安心できる所として受け止める積極的な意味をもった様に見える。栗田は始め一人だけのせい、いつもより、のびのび

19. コインソシオグラム：モレノによって開発される。別名社会相関図とも言われ、集団成員間の関係や地位などを分析・測定する。集団の中における相互作用は人々が相手に対して抱く感情に基づいており、空間的に図示することで、客観的に自己を分析できると言える。詳しくは述べないが、自分を周りに、近い人と遠い人を配置し、さらにそれぞれに価値づけていることが取り組みから分かる。

20. 自己開示が前回よりも強く働いている。あるいは見知った仲であるためグループワークが継続された可能性もある

21. ここでは、家族や交友の関係を客観し→サイコドラマで再構成→生活力の強化・修正を狙っている。

22. まともでも書かれているが、環境はかなり複雑でよいとは言えない。

しており、話の仕方やドラマでの演技もとても自然で、素直であった。

自分を1円のコインで現し、それを母親のコインと、とても近くに並べ、もっと自分に優しくしてほしいと訴えている栗田のドラマからは、貧しい環境のなかで多くの問題を抱えつつ生活している家族の悩みが強く感じられ、ワーカーたちにとって、対象者を理解する大きな助けとなった。

正田が短時間でも顔を出したのは嬉しかった。

第5回12月1日藤井(学校の都合)と正田(理由不明)が欠席

最近の自分の生活を絵にかいて、それに登場した人物の顔を紙コップの底にマジックで描き、人形劇のようにそれを動かしながら、みんなに状況を説明していく、というプログラムだった。栗田は期末テストの期間中なので成績がよくて明るくやっている他の子たちと暗くなって勉強している「ぼく」たちを登場させ、最近の心境を説明した。川村は腰をいためて入院中の母を見舞った場面を描き、そこで母と言い争いになったことなどを率直に話し、病院から自分のことを心配して電話をかけてくる母について肯定的に説明した²³。

お茶の時間には、次回のクリスマスパーティについていろいろメンバーの意見を聞きながら計画をたてた。

(評価)

メンバーが自分の生活や人間関係について率直に話し、それについての他の人の意見にも耳を傾けていく姿勢があることが印象的であった²⁴。いつものことだが絵をかいたり、それを説明したりする活動に、ワーカーもボランティアもメンバーと同じように一緒になって参加し、自分のことを語っていくというグループワークの方法が大きな効果をもっているようである。

川村と母親との関係を改善していくためには、落ち着いてより客観的に自分をみていくこのような機会を重ねることが大切であるし、また、母親との面接にこのようなビデオをみてもらい母親には見せない子どもの母親への愛情を知ってもらうことも有効であろう²⁵。

藤田の欠席は彼女の高校進学を支持している学校側の希望で、いまが進学指導→P.26 に重要という判断であり、十分に理解できる。正田は通常の保護観察官とのケースワーク面接にも無断で欠席、全般に生活が乱れているらしく、心配である。

第6回12月22日藤井(学校の都合)が欠席 D保護観察官とM保護観察官がお客さまとして特別参加

ボランティアの人々の手で、会場がクリスマスらしい雰囲気になり飾り付けられ、おいしいたくさんのご馳走が並べられた。素敵な音楽もながれ、パーティらしい華やいだ感じ²⁶。久しぶりに出席する著者のために、それぞれ近況を報告してくれる。ついで一年の終わりの月なので、「一年の振り返り」として部屋の中の椅子を12、それぞれ今年12ヵ月に見立て、今年一番思い出の深かった月の椅子に腰掛けてもらった。栗田はさっと12月の椅子の前に立ったが、みんなが長時間をかけて動いているのをみて、7月に動く。全員が腰をかけてから、それぞれその月を選んだ理由をきいた。栗田は7月に修学旅行があったからと説明、すぐ、「違反物をもって行って」と旅行先での自分達生徒と先生とのトラブルにふれ、楽しかった思い出はみんなに質問されてやっと出てきた。川村は泳ぎにいった8月を選んだ。その後、12月の椅子に座り、そこから7月や8月などの椅子に座っている自分に声を掛けて終わった。

食卓にもどった時、正田が入室。顔もよく見えない感じに前髪を垂らし、暗い表情であった。栗田が自分の家で書いた手作りのクリスマスカードをみんなに配る。それぞれの人にあてた文章が書いてあるので、皆それを読んで、感激、口々に礼を言う。ケーキやサンドイッチを食べながら、第1回目にとったビデオをみる²⁷。緊張している自分の姿などを笑いながら批評し、思い出話をする様子は3ヶ月前のメンバーとは全く違って、リラックスし信頼しあっている姿があった。正田も徐々にグループに溶け込んでいった。

23. 5回まで読んで：常にプログラムがそれぞれのメンバーの環境、特に家族(問題の所在)に置かれ、巻き込まれている、あるいは置かれている状況を客観的に見る、対応力を自らの言葉で作り上げようとしていることが分かる

24. 凝集性とメンバー間の受容とか共感、あるいは親密感が育ってきている証拠であろう。

25. 家族療法の要素も見られる。

26. 6回目～クリスマス会というイベントが中心であるが、すでにプログラム活動に組み込まれている。残り2回で、1回は終結期であることから、振り返りつつ、活動の取り組みを再確認している。

27. グループとしての発達を形成期から振り返り、このグループワークの有効性を再確認してメンバー同士の肯定や変化を引き出している。

プレゼント(500円程度)を交換の後、くじ引きで相手をきめ、クリスマスカードにメッセージを書いて、その人にあげることにする。キャンドルライトだけにし、全員輪になって集まり、自分がもらったカードを読み上げ、それぞれ来年への希望を述べて終わった。

(評価)

栗田の積極的な態度がとても印象的であった²⁸。忙しいからと参加に消極的だった自分の保護観察官を階下の事務室まで迎えにいったり、真っ先に椅子の前に立→P.27 ったり、全員に家からカードを用意してきた、など。彼女の生活のなかで、自分が尊重され、受容されて自分の気持ちを聞いてもらえる、このような場がとても重要な意味を持つことが感じられる。川村も楽しそうに自分のビデオに見入ってよく笑っていた。記録のためばかりでなく、プログラム活動にもビデオが有効である。正田が短時間でも出席できたのはよかった。しかし、彼女がいまの生活のなかで感じているいろいろな悩みや痛みについて、全然ふれずに終わったのは、ワーカーと担当の保護観察官との連絡の不十分さの反映で、反省している²⁹。

第7回1月6日全員欠席栗田(母親の出産)川村(仕事)藤井(受験準備)正田(理由不明)

ワーカーとボランティア、全員で栗田に「赤ちゃんのお誕生、おめでとう」の寄せ書きを書き、保護観察官に送ってもらう。

第8回1月19日正田(理由不明)が欠席

今回で終結となる。円形に座り、最近の状況を話し合う。新年を迎えて、これからの生活を語るのに「守護天使」の技法を用いる³⁰。自分を守っている天使がいると仮定して、その立場から、自分の課題を語る方法である。ボランティアの「明日の試験に今晚一生懸命やれば、うまくいくようにこの人を守ってあげようと思って」などという言葉聞いていた川村は今日で3ヵ月も仕事がつづいていると嬉しそうに言い「仕事をやるのはいいけど、自分の時間を有効に使うように守ってあげたい」といい、就職を心配している栗田は「先生に言われたら素直にテキパキ話せるようにしてやりたい」などと語る。

栗田はこの時期、進学先や就職先が決まっていく学友の中にいてあせりを感じている様子。就職面接が苦手だという栗田のために就職のドラマをとりあげる。

教室で先生に就職のことを聞かれる場面、自分の就職先を見つけてくれようとしている父親に家で就職面接のことを尋ねる場面、ついで就職面接を受ける場面などを演じる。それぞれの場面にボランティアの「補助自我」を用いて、栗田の分身(ダブル)になってもらい彼女の気持ちを二人で話し合って貰う。それによって就職の決まらぬ不安やあせりがよく言語化された。面接試験の場面では、すでに先輩である川村の助言をもらいながら、役割をとる。つぎに栗田に観客席から栗田の演じた通りにボランティアが面接場面を演ずるのを見てもらう³¹と栗田は「コチコチだ」と笑いながら自分を批評していた。メンバーを変えて面接の「い→P.28 いやりかた」のロールプレイを何回か行う。

その途中で藤井が遅れて入場。さらに、栗田が勤めに出る朝の場面を演じることにし、彼女に朝食を作る母親の役を何人かの他のメンバーにとってもらい、いつも学校には朝食を食べないで行く栗田に、勤めたらよい朝食をとる大切さを伝えた。いろいろなメニューの朝食が出てくるので、笑い声が絶えなかった。ラッシュの電車に乗っている場面を演じ、全員で押し合い、へしあい。勤め先について「お早うございます」と栗田がさわやかな挨拶をするところでドラマが終わる。

川村は「面接の時、今日のことを思い出したら、少しは緊張しないですむ」と栗田を励ましていた。

終結にあたってこれまでの感想をのべてもらう。「はじめはエーッ8回もあると思ったけど、だんだん、今日は誰が来てるかな、なんて思って」(川村)「初めて会ったとき、これからやっていくのに大丈夫かなと思ったけど、みんなすごくいい人だったわかった。また機会があったらやってみたい」(藤田)「ずっとやってみたい

28. サブリーダーになりうる可能性があったが、回数や人数が少なかったことから十分には発揮できなかったと言える。とはいえ、少ない人数でも役割の分化が見られている。

29. 後の方で述べているが、ケースワーカーとの連絡のとりようによっては参加を引き出せてのかもしれない。

30. 勉強不足で、実際にどのように運用するのを調べる事が出来なかった。が、おそらく、ある種の決意表明であるが、それは自分で自分を縛るのではなく、守護天使という仮定のものへの願いという形で緩やかな物になっている。そして、他者に聞いてもらえるという受容的な雰囲気グループに形成されていることが分かる。

31. ダブルとミラーが連続して行われている。このことによって、相手の気持ちになって答えることが、相手が自分だったらこうして居るんだと客観視出来る。

な」(栗田)など。この3人に全員から言葉やイメージの贈り物をして終わる。勤めながら定時制高校に行くことが決まった藤田には「あなたの可愛いらしさをずっと持ってほしい」(川村)「睡眠不足にならぬように」(栗田),何となくぎこちなく歩く栗田には「すすつと歩ける靴」(川村)「ハンパしないでおさえる勇気の木」(藤田),大人のイメージを持つ川村には「あと何年後かに素敵なお赤ちゃんを私に見せて下さい。」(藤田)「絵が好きな川村さんに,絵が毎日よく描ける鉛筆」(栗田)がそれぞれ仲間から贈られた。

お茶を飲みながら楽しいおしゃべり。このグループが今回で解散するのが残念で,いつか,また同窓会を開いて貰いたいとの意見がメンバー全員から出される。

記念の写真が欲しいという川村の強い希望で全員カメラの前に並ぶ。栗田が手を大きく広げてポーズ。再会を期待して終結した。

(評価)

川村は仕事を3ヵ月間続けているせいか,発言がとても活発でまた自信が感じられた。栗田や藤井にも優しい思いやりを見せていた。終わりになるのが残念だと一番積極的に発言。栗田は初詣でワーカーにお守りをもってきてあげた,と家からそれを持参,口数は少ないがワーカーに親しい気持ちを現し,こちらの質問には一生懸命答えている。藤田はひさしぶりだが,終わりに参加できてよかった。就職にふみきり,定時制とあわせてがんばりたいという彼女はボランティアに→P.29 いろいろ励まされて嬉しそうだった。

今回のドラマは参加者の高い自発性に支えられ,興味深く展開した³²。やっとみんなが役割を自然に取ることに慣れてきた感じである。これからというところで,終結になった残念さを全員が感じていた。

同窓会3月23日

メンバーの希望をいれて,「同窓会」を開いた。川村と栗田が出席。久しぶりでお互いの顔を見て,懐かしむ声しきり。これまでのビデオを見たり,近況を話したりして,楽しく過ごした。栗田の就職がまだはっきりしないのでみんなが気がかりだった。父親を頼りにしている様子。理解のある職場が与えられることを祈りたい。

7.考察

このプロジェクトに参加した人々は,それぞれの立場から,このグループワーク体験についてどのような感想を持っているだろうか。

メンバーたちは,欠席がちで明確な意見を聞く機会のなかった正田をのぞいては,全員が,このグループに対して愛着を示し,もっと続くことを希望した。「面白かった」「楽しかった」というのがもっとも代表的な感想である。グループの人達に第1回から親しい感情を見せていることは,他の人々の発言を聞いたり演技を見ていたりするときの表情から明らかであり,この点は,ビデオを丁寧にプレイバックすることによって確かめることができた。仲間のメンバーたちにも次第に思いやりのある発言が見られるようになり,相互支援システムとしてのグループが育ち始めている。

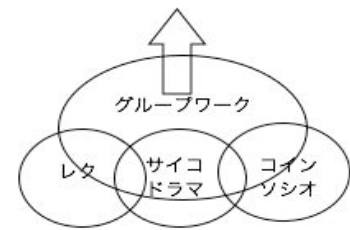
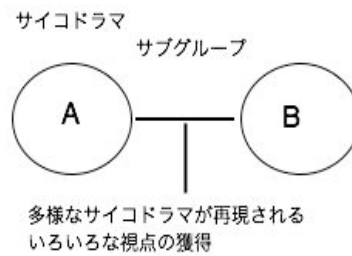
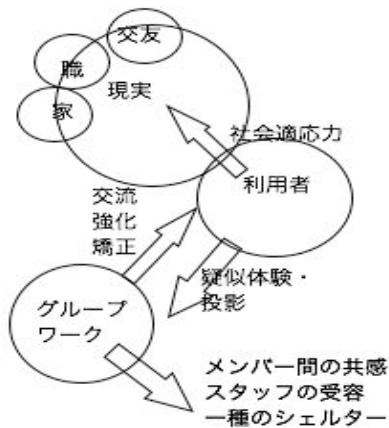
ボランティアの学生達は「楽しかった」,「もっとやりたい」と高い興味と参加への動機をみせているが,それは非行という問題に悩む少女達の深刻な生活実態と困難をのりこえて健気に社会の中で立ち直っていくとする彼女達の生き方にふれ「とても勉強になった」し,それによって「多くの贈り物を貰った」気持ちだという。

広川保護観察官は「100回の面接より1回のドラマが対象者の本当の気持ちを理解するのに役立つ」という感想を述べ,観察官として今回のグループワークに参加した最大の意義が自分の対象者理解が深められたところにあったとしている。

ワーカーとしての著者も楽しい経験の中から多くのことを学ばせてもらった。→P.30

以下,始めにかかげたこのプロジェクトの研究項目に従いながら,考察していく。

32. もともとサイコドラマは,メンバーの主体性や積極性が要求される。うまい具合に開始期からグループの形成が図られ,何回も行われたことで良いセッションになったといえる。ボランティアまで習熟していたのが成功の鍵であったといえる。メンバーに見本を見せる。手伝うという役割は大きいと思う。



1) グループワークによる相互作用効果について

処遇期間がわずか4ヵ月であり、5年または6年にわたる対象少年の保護観察期間にくらべて極めて短期であるため、非行性の根本的な改善に対してこのグループワーク処遇がどこまで効果があったかを客観的に示すことは困難である。また対象者の問題や家庭環境等に関する情報が限られていたので、処遇システムの効果的な一部分として十分に機能したとも言えない。しかし、短期間であっても、ある程度の効果を見ることができた。それらに基づいてグループワークによる相互作用効果の主なものをあげれば次の通りである。

- (1) 他者から認められたり、他者を助けたりする機会がグループ活動のなかで多く与えられ、メンバーは自己をより肯定的に受け入れ、自信を持つようになる。
(川村が自分の面接経験から栗田をコーチした、栗田がメンバーにクリスマスカードを持ってきた、空想の贈り物をあげた、などがその例である。)
- (2) プログラム活動を通して自己の感情や行動の持つ現実的な意味について洞察を深める。
(栗田が就職面接にのぞむときのドラマで、「分身(ダブル)」を用いて、自分の気持ちを言語化しつつ行動したときなどが、その例である。)
- (3) メンバーのサポートを与えられ、自己の問題行動を改善したいという動機を強める。
(川村が栗田のぎこちない歩きかたを気にして「すすすつと歩ける靴」をあげたが、川村は栗田のぎこちなさについては、これまで一度も直接表現したことはない。そこに彼女のやさしさがあるとも言えるがグループが発達していけば、このような問題をより直接的にとりあげ、改善のためのサポートが他のメンバーから栗田に与えられるだろう。非行に関しても藤田が栗田に「ハンパしないで押さえる勇気」を贈っているように、問題解決にむかって互いに助け合う気持ちが育ちつつある様子が見られる。このグループワークがある程度、長期に続くのであれば当然非行の根になっている各人の問題を直接とりあげ、行動改善を計っていくことは十分可能であることが今回の試みから示唆されたと思われる。)
- (4) 自分の家族や身近な人との関係をより客観的に把握し、否定感情を比較的自由に表現し、その感情を変化させる機会を与えられる。→P.31
(コイン・ソシオグラムなどのウォームアップから家族劇をしていった栗田の場合などがその例である。)
- (5) 非言語的コミュニケーションの活用によって、自己表現を活発にし、グループの仲間と比較的短期間で友情を育てることが可能である。
(グループワークでは伝統的なレクリエーション活動やお茶の時間などに加えて今回は絵やドラマなどの表現媒体がとて効果的であり、初回から仲間感情が育ったといえる。)
- (6) 「権威を持つ者」に対する否定的感情が次第に修正され、大人をより肯定的に受け入れ始める。
(広川保護観察官は毎回セーター姿で参加するなど、非権威的な態度を伝えることに気を配っていたが、同氏の率直な、また誠実で優しい気持ちはメンバーによく伝わっていたと思われる。これは当然メンバーが持つ保護観察所に対する感情に影響を与えるものと思われる。しかし、処遇はチームで行われるのであるから、後述するように常に個別のケース担当の保護観察官との緊密な連携が必要である。そうでなければ、楽しいグループワーカーはよい人、厳しい現実的要求を出してくるケースワーカーは悪い人というワナにおちいるおそれがある。)
- (7) グループ内の他の人々をモデルにし、いろいろな状況で積極的に適切な役割行動がとれるようになる。
(あいさつや会場の片付け、お茶のすすめかたなどでボランティアがよいモデルになっていたと思われる。今回はお茶の用意や後片付けなどはすべてボランティアの責任で行ったが、次回はメンバーも一緒に責任を分担してもらおうほうがより目的にかなうと思われる。)

- (8)実生活に有用な情報の交換や行動の学習があり,生活技術を習得したり,改善できる。
(中学を卒業して就職する栗田は「履歴書」について知らなかった。また面接の際のマナー,電話のかけかた,などについてもグループのなかで劇をしながら教えられた,などがその例である。)
- (9)現実的な将来の計画について検討する機会を多く持てる。
(今回はおもに就職などの問題しか取り上げられなかったが,ボーイフレンドや性の問題,家族関係の問題,などもっと深い関心のある問題を将来にわたって取り上げることが可能であると思われる。)

2)保護観察対象少年のためのサイコドラマ・プログラムについて³³→P.32

これまでに実験的に行われた保護観察少年に対する東京や大阪でのグループワーク・プログラムではレクリエーションやスポーツなどが多かった。それぞれ効果があると思われるが,今回は,これまで余り取り入れられていないサイコドラマ的な活動を試みた。サイコドラマの創始者は精神科医,J.L.モレノであり,始めは集団精神医療として発達したが,後には矯正教育や一般的自己成長を目的とするグループにも取り入れられてきた。さらに後になって社会的役割を学習するロールプレイがサイコドラマから生まれてきたが,サイコドラマそのものは主役となる個人に焦点をあてつつ,劇的手法によって,その主役の心的真実をグループメンバーとともに探究していく方法であり,ロールプレイよりも全人格的な関わりを要求し,心理的な深さを持っている。主役の生活状況やその中での生活感情,人間関係が具体的に演じられるので,適切な指導があれば,グループメンバーには主役との同一視を通して強い仲間感情が生まれる。

今回の研究では,このサイコドラマ技法を多く取り入れたプログラム活動を試みた。自己表現,自己洞察,創造性,自発性の促進による集団参加への興味,仲間への理解と共感の深化などの点でかなりの成功を納めたと思う。これは特に女子少年のように感情表現へのニーズが強い対象者に向いているプログラムである。

単なるレクリエーション活動ばかりでなく,「いま,ここでの」感情や生活課題に即した行動のとりかた,人間関係の改善を促進する「生活のリハーサル」ともいえるサイコドラマは今回のプロジェクトの結果,保護観察対象少年に対するグループワーク・プログラムとしてきわめて有効であるという結果をもたらした³⁴。

「お茶の時間」はサイコドラマと同様に大切なインフォーマルなコミュニケーションの時であり,サイコドラマ的体験へのフィードバックをもらう重要なプログラム活動であった。

将来的には,初回に週末にでも一泊の合宿を行えば,時間的に余裕があり,より深いドラマができる可能性がある。その後のグループの凝集性に大きな違いがうまれ得る。それによって,隔週の会合からくるマイナスを少なくすることができる。費用と人の問題に工夫が必要であり,民間の支援などを得ることも考えなければならないだろう。

サイコドラマをプログラム活動とする場合には,人数がもう少し欲しいところである。期間がもっと長ければもう3,4人増やして,対象者が7,8人位いれば,多様なドラマが出来,相互に学ぶところが多く,サブ・グループも出来,グループ形成にも有効であろう³⁵。→P.33 少年達のおかれている環境の困難さから,グループへの動機はあってもメンバーが出席できないこともあることを考慮に入れておかねばならない。

3)ボランティアの果たす役割について

今回参加したボランティアは,対象者よりも6,7歳年長の「おねいさん」であり,身近かな存在として,ワーカーや保護観察官との年代や地位のギャップをうめる役割を果たした。また,毎回のプログラムでは,ボランティアも対象者とまったく同じ立場で活動に参加したので,ボランティアには自分の生活や人間関係に関するある程度の自己開示が要求された。

それ等の中には,神社の巫女をしている自分のアルバイト体験,自分の家族の問題,ボーイフレンドとのこと,就職の心配などがあった。そのような問題についてボランティアが率直に語り,考えていく姿は,少女たちにとってグループの中で問題をとりあげていく際のよいモデルとなったと思う。服装,髪型,音楽,テレビ番組,お料理などについて,ボランティアと交わす話から,女性同士としてのアイデンティティが強められたと思うが,これも若い同性のボランティアとしての貢献であった。

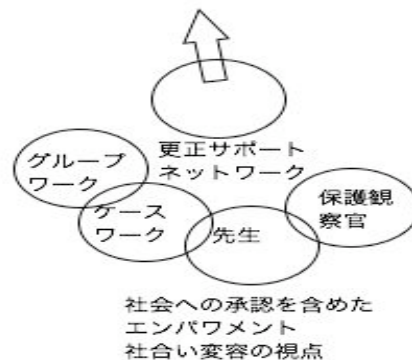
実務運営上,プログラム活動の準備や後始末の実際的な労力をほとんどボランティアに依存した。クリスマス・パーティのためのこまごました買い物はみなボランティアが行ってくれたものであり,この人達の協力がなければ細部に配慮した活動は不可能だったといえよう。

33. 上段の下線部分をサイコドラマの説明に使用すること。

34. 治療と紙一重な所もあったが,あくまでも生活課題に志向していたため,ともすれば自己批判とか個人の矯正になりがちなものを回避している。プログラムの考え方については,上記の図表を参照する事。

35. 上の図表を参照すること。

非行少女のラベルを貼られている人々が実際には、どのような心理的、社会的重荷を負って毎日を送っているかについて、ほとんど一般の人は知らない。たとえば、栗田は2DKの都営住宅に8名で生活しており、ギャンブル好きの継父と実母に絶えず叱られ、幼い弟や妹の面倒を見なければならず、観察所にくる電車の中が自由になれて楽しい時だと語っていた。ボランティアとして、対象者のこのような実態を教えてもらえることは大きな特権とも言え、今回のボランティアの一人が自分の経験を「大きな贈り物を貰った」と表現しているのは主にこの点にあるのだろう。ボランティアは「共に生きる社会」の価値を代表する存在であるが、そのための役割を実際に担って行くときには、このような対象者の生活の現実をよく知り、また専門家とよいパートナーシップを組んでいかなければならない。今回、時間は限られていたが、準備期から終結期にいたるまでのワーカーとボランティアの共同作業は大体順調にいったと思われる。ボランティア達がこの→P.34 経験を生かし、将来とも福祉社会のよい一員として活躍されることを期待したい³⁶。



4)望ましい処遇システムのありかた

グループワーク処遇が成功するにはケースワーク処遇との連携が不可欠である。これはチーム処遇の原則である。今回のプロジェクトが「研究班」の仕事として、外部から保護観察所に持ち込まれ、またワーカーが大学の人間であるため、内部システムの有機的な一部にはなり得ないという制約のなかで行われたのは、実験としては止むを得なかったであろう。しかし、予測した通り実践の結果として、上記の原則を再確認することとなった。

保護観察官の面接やグループワーク・サービスは、保護観察少年の生活の極めて限られた部分を占めるに過ぎない。社会内処遇の成功は地域の生活の中で対象者が更生のためにどのようなサポート・ネットワークを持っているか、或いは、それを作るためにどう援助するかにかかっている。グループワークにおける個別メンバーの援助目標もそのサポートネットワークとの関連で大きく変わってくる。

個々のケースを担当する観察官が、そのケースに対してどのようなアセスメントを行い、当面どのような処遇目標をたてているのか、その保護観察官のたてた処遇目標が主要なサポートネットワークたり得る親や学校の先生などの考える指導目標とどう一致しているのかそれらの点につき、事前によりくの情報ケースワーカーである保護観察官から得ていけば、グループワークにおいてより適切な個別的な働きかけが出来たかも知れないと思われる。

また処遇とアセスメントは常に螺旋状に間断なく展開していくものであり、グループワーク処遇の中でケースワークのためにメンバーから得てほしい情報や申し送って欲しい情報について、あらかじめ連絡がついてると全体の処遇が豊かなものになる。もちろん情報が原則としてワーカーの間で交換されることについて対象者に伝えておくのは当然である。

さらにケースワークを担当する観察官のための情報伝達方法についても工夫する必要がある。ビデオの記録はスタッフにとってきわめて効果的であったが、保護観察所にはビデオの再生機が所長室にわずか1台あるのみで、担当ケースについて各保護観察官がグループワークの様子を見ようとしても、不便であったので改善が望まれる。また実際にビデオを見るとしても時間がかかり過ぎるので、その他の効果的な情報伝達の方法をも工夫することが必要である。

今回のような処遇プログラムを実験でなく、本格的な処遇システムとして位置→P.35 づけるには今後どうあればよいのか。これは保護観察少年の社会内処遇全体についての見直しと関係してくるが、さしあたり著者が痛感した事が2つある。その1つはコンサルテーションの制度を作る必要性である。グループワークには

36. このグループワークが行われてすでに20年以上が経つが、その後どうなったのか。そのことについては分からないが、連綿と続く社会福祉実践の一端を見る事が出来る。

訓練された専門家の力量が要求されるが、保護観察官や保護司、またはBBS会員の中にそのような専門家を得ることは容易ではない。しかし、専門家をコンサルタントとして用い、自分達の処遇を向上させることは不可能ではない。保護観察官が自分の仕事に熱意を持ち続ける事ができるように、保護観察所に処遇技術のコンサルテーション制度の導入が欲しいと思う。

今回の経験を通じてもう一つ感じたことは民間の手による処遇のための社会資源の開発の必要である。民間のサービスが発達すれば、民間団体が保護観察所の委託をうけるか、あるいは公私協同で、より設備のよい場所で、より専門的に対象者によりグループワーク・サービスを行うことができるだろう。民間のBBSや更生保護関係の団体も非常な努力をされてはいるが他の社会福祉関係分野で、ボランティアが専門家に使われるのではなく、自主的に専門家のパートナーとして活動し始めているのに比較すれば、対象者が法の処分を受けているという制約があるとしても、更生保護の分野では、全体的にまだ活力ある民間の団体や自主的なボランティアの働きが十分には育っていない感じがする。一般の市民や青少年団体の無理解、無関心に加えて、社会福祉サービスやソーシャルワーカーの働きを狭い厚生行政の領域に閉じ込めがちな社会福祉の学問の世界にも大きな原因があろう³⁷。これらは筆者にも関わる問題であり、対象者の処遇向上のために今後も努力していきたいと思う。

参考文献

- ・増野肇,心理劇とその世界,金剛出版昭和52年
- ・台和夫,増野肇監修心理劇の実際,金剛出版1986年

37. 現在は、非行少年のみならず、司法において社会福祉士などのソーシャルワーカーの必要性が唱えられており、実際に、試験科目としても設置されてきている。さらに、昔は臨床心理士か保健師が学校の仲での相談役となっていたが、同様にソーシャルワーカーも設置されてきている。いずれにしろ、権利擁護などの観点から社会福祉は役割が明確化してきており、今後職域の拡大は図られていくと思われる。